かがわ里海 ·SATOUMI· かわら版

Vol.3

かつての里海を知る生き証人

里海名人たち

限られた自然を上手に利活用しながら暮らしてきた「里海名人」たち。実体験に基づいた生きた言葉は、未来を考えるヒントを与えてくれました。

合木 淳智さん

たこつぼ漁の様子

小手島で伝統漁法を伝える たこつぼ漁師

丸亀市沖に浮かぶ小手島で、60年以上漁師をしてきた合木淳智さん。GPSのない時代、山の重なりを見ながら海上で場所を特定する「山立て」や、80個ものたこつぼをつけた重いわら縄を手作業で引き上げる苦労など、機械化される以前の漁の話を聞かせてくれました。「昔に比べると作業効率が上がって獲れる量は増えたけれど、獲り過ぎちゃいかん、海を壊してはいけない」という言葉が印象的でした。

手前 / 素焼きのたこつぼ、
奥 / プラスチック製のたこつぼ。
現在はこちらが主流に

藤上 繁昌さん

藤上さんの育てる原木しいたけ

塩江町の山の名人

塩江に生まれ、13歳で父親の後を継いで炭焼き職人になったという藤上繁昌さん。木炭づくりのために伐った山の木は、育つまでに30年ほどかかります。その間は製材所で働き、今は原木しいたけを育てています。山仕事の変遷を語りつつも、「10年後には原始林みたいになるのでは」と危惧します。「伐ることで山は育つ。今から山へ入っときなさいよ。山が豊かだからきれいな水ができるんですよ」。

塩江町の山

発行/香川県（平成28年3月）　問合せ先/環境管理課 水環境・里海グループ　〒760-8570 香川県高松市番町四丁目1-10　Tel.087-832-3218　Fax.087-806-0228

satoumi project
Seto Inland Sea, Kagawa

広がれ！ 里海女子・里海男子

香川大学教育学部附属 高松小学校 5年緑組

5年緑組の児童たちと黒田 拓志先生

身近な環境問題を教材に

児童たちは社会科の「環境」の授業で「里海づくり」を学び、身近にある環境問題に対して何ができるか考えています。そのきっかけを作ったのは、黒田拓志先生でした。「教科書から環境問題を学ぶだけではなく、身近にある環境を守ろうと思える人間に育ってほしい」。黒田先生はそんな熱い思いを抱き、香川県が取り組んでいる「里海づくり」を5年緑組の授業のテーマにしました。

里海づくりを学んで…

最後の授業では、総まとめとして「里海づくり」の問題解決に挑みました。「環境を『保全』するためには、イベントなどの『開発』をして、自然への親しみが薄くなってきている市民に興味をもってもらうことが大切だ！」と、児童たちによって黒板に隙間なく書かれた解決方法。方法は分かったものの、現実は厳しく、「未来を背負っていく自分たちがこの先も考え続けなければならない」というのが、児童たちの出した答えでした。

環境を守り、持続可能な社会にするために

「里海づくり」を学んだ児童たちは、「休みの日に図書館で環境問題の書籍を借りたよ」「実際にごみを拾い行ってきたよ」と、環境問題に対して、自分たちができる事を少しずつ始めています。「里海づくり」の授業は終了しましたが、児童たちからは「まだ学びたい」という声が飛び交っています。その熱意に応えるため、黒田先生は春から6年生になる児童たちのためにまた動き出しています。

香川県内で「里海づくり」に関わる方々を招き授業。そこで児童たちが学んだことをパネルに。

最後の環境の授業は、公開授業でした。児童たちは次々と自分の意見を黒板に書いていきます。（平成27年度初等教育研究発表会）

かがわ里海「聞き書き」プロジェクト

大切なのは「自分ごと」にすること

「聞き書き」は、まずインタビューし、録音した会話を書き起こして、里海名人の語り口調を生かしながら文章にまとめていきます。参加者と里海名人たちの年齢差は半世紀以上。言葉の意味がわからず、すぐには理解できなかった話も、音源を繰り返し聞くことで理解を深めていきました。

「今も昔も、人は山なしでは生きていけないし、山も人なしでは生きていけない」「地域との関わりが薄く

里海名人たちが暮らしてきた時代のように、再び人と自然をつなげようと「里海づくり」に取り組む里海人が増えてきています。その中から、里海女子・里海男子の取り組みをご紹介します。

里海の記憶を次世代に受け継ぐ

山川海に囲まれた香川県は、古くから自然と共生し、持続的に暮らす知恵や技を培ってきました。それらの多くは、暮らしの中で親から子、孫へと「体験」を通して受け継がれてきたもの。「聞き書きプロジェクト」とは、そんな長老たちの元を地元の高校生・大学生たちが訪ね、「聞き書き」を通して、かつての里海の記憶を次世代へとリレーしていくプロジェクトです。

なっていくことで、伝統が失われ、自然が汚されてしまう」「目の前の海で獲れる魚なのに、知らない名前がたくさん出てきて、自分の海との関わりの薄さを知った」など、参加者からは等身大の感想が多く聞かれました。

日常生活では気づけない今と昔の変化や、人の暮らしがどう自然環境に影響を与えてきたのかなど、どれも他人事ではない自分たちの地域で起こった事実。一人一人が里海名人から受け取ったメッセージは、冊子としてまとめていきます。

郷土料理の鯛めし作りに挑戦

徳島文理大学香川キャンパス レインボーの会

『レインボーの会』のナノ物質工学科の学生たちと水野 貴之准教授

環境問題を『食べること』から考える

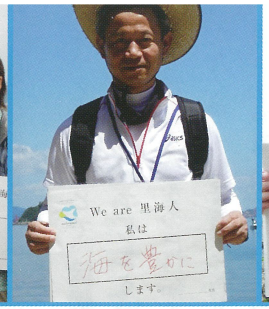
『レインボーの会』は、大学から一望できる志度湾を中心に海の水質調査や実験を行い、大学と地域がともに発展することを目的として活動しています。「食べ物を美味しくするためなら、人は団結できる」という意見から、レインボーの会では『海苔すき体験』などを通じて、「どうすればおいしい食べ物ができるか」科学的に説明するイベントの開催や、地域の特産を生かした新しい食品の開発に挑戦しています。

「豊かな海」のヒントは川にあり

「『豊かな海』とはどんな海なのか?」レインボーの会の学生たちが話を聞いたのは、志度湾の漁師の方々でした。志度湾には同じ漁師といえども養殖業に携わる人もいれば、沖に出て魚を獲る人もいます。取材を進めて行くうちに学生たちは、携わる仕事や場所によって求める「豊かな海の栄養バランス」に違いがあることに気付きました。そこで、学生たちは山から海(志度湾)に「栄養」をもたらしてくれる鴨部(かべ)川の調査を開始。さらに、鴨部川流域で保全活動に取り組む複数の団体の意見交換会に、レインボーの会も参加。流域の活性化のための活動やイベントを地域に広めるための意見を出し合っています。

鴨部川流域の保全に取り組む団体との交流で「同じ目的を持つ仲間が増えた」との声。

鴨部川の保全に取り組む団体同士で行う3回目の意見交換会で、「かがわの里海づくり　鴨部川流域ツアー」を開催。海から鴨部川上流まで実際に足を運び、水質調査をしながらそれぞれの団体が行っている活動について共有しました。



We are 里海人

1000年先の未来へ。
美しい里、豊かな海

satoumi project
Seto Inland Sea, Kagawa

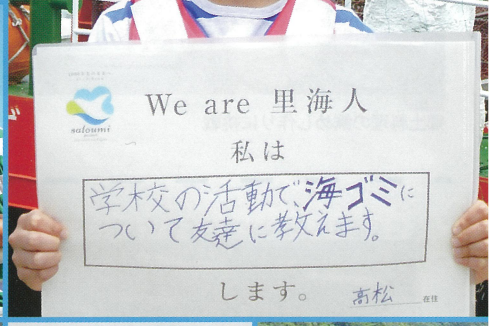
かがわの里海づくり

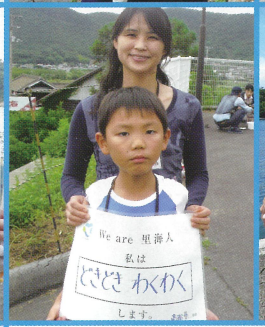
表彰されました。

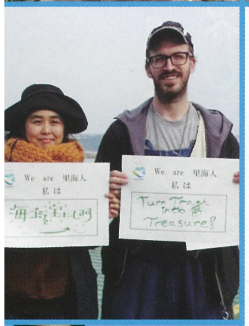
環境省
第３回グッドライフアワード 環境大臣賞優秀賞

プラチナ構想ネットワーク
第３回プラチナ大賞 審査委員特別賞

環境省
四国環境パートナーシップ表彰 森里川海部門







日本観光振興協会主催
「産学連携ツーリズムセミナー in 関西」

香川大学の学生が最優秀賞を受賞しました

▲受賞時の写真

香川大学「またたび（地元再発見の旅プロジェクト）」の皆さんが、"学生による観光振興に関するアイデア・研究発表会"に参加しました。学生は、民・学・官がつながり実現した『離島の海ごみツアー』を題材に「瀬戸内海の里海観光プロジェクト～海ゴミの清掃ツアーと新たな交流コンテンツによる魅力創造～」という内容で発表し、全国50件の応募の中から見事、最優秀賞を受賞しました。